

## 令和4年度静岡県広報コンクール 最優秀賞作品への審査委員からの寸評

### 御殿場市【市広報紙部門】

(審査委員) 読売新聞社静岡支局長 笠原 拓  
静岡大学教育学部 准教授 川原崎 知洋  
静岡県広報デザイナー  
有限会社アドクック 相談役 前田 ミネオ

#### 個別の寸評

- しゃれた表紙が印象的。ハンセン病特集は、歴史、療養所の説明、会長のインタビュー、学生の声など盛りだくさん。読めばハンセン病の概略がつかめるほどの充実ぶり。「療養所のあるまち」の矜持を見た思い。
- 「ハンセン病を知る」の特集。ハンセン病を知ることで、共生社会のあり方や多様性について改めて考える機会となる。ハンセン病の歴史的な背景と入所者への詳細なインタビュー記事を通し、現在のコロナ禍における「新たな分断」の問題にまで切り込んでいる。記事の切り口だけでなく、特集にかける熱量や構成が秀逸。本特集のように、地元に関心した話題を取り上げることで、私たちの社会全体の課題として広く周知することも広報紙の大切な役割だと感じました。
- 13 ページにも及ぶ“ハンセン病を知る”特集は、差別や偏見問題に繋げる企画コンセプトに合致している。イントロ、駿河療養所の歴史から始まり 01～04 の4つの視点で構成するなど、隙が無い。フォントにも気配りがあり丁寧なレイアウトとなっている。

### 川根本町【町広報紙部門】

(審査委員) 静岡新聞社 編集局長 石川 善太郎  
静岡デザイン専門学校 講師 本野 智美  
静岡県広報業務アドバイザー 八木 朋美

#### 個別の寸評

- 力作。毎月の広報紙を発行する傍ら、大きなストーリーを追い続けてきた担当者の思いが伝わってくる。広報紙を単なる「広報」にとどまらせないという志、決意を感じた。
- 地域の問題を子供達と解決するプロジェクトを丁寧に取材しています。「出会い→アイデア→完成！」など、プロセスをつなげて構成してもわかりやすいと思いました。
- 特集のお茶染めプロジェクトは、企画者や関わった子どもたち等の思いや様子がたくさん掲載され、この企画への情熱や町への思いが感じられます。現状の表紙の写真もとても魅力的だが、特集に合わせた写真を活用すると、この号の良さが尚伝わったのではないのでしょうか。

### とぴあ浜松農業協同組合【団体広報紙部門】

(審査委員) 静岡新聞社 編集局長 石川 善太郎  
静岡デザイン専門学校 講師 本野 智美  
静岡県広報業務アドバイザー 八木 朋美

## 個別の寸評

- 冒頭（2、3ページの見開き）から写真に圧倒された。「エシャレット産地誕生70周年」の特集は秀逸だった。
- 広報紙の厚さにまず驚きました。取材力がすごい。この情報量をまとめ上げるデザイン力もさることながら、各コラムの笑顔を引き出した大量の写真群にも脱帽です。
- 特集はたつぷりとページを割き、地域特産品エシャレットへの想いが伝わる充実した内容です。全40ページあり、広報紙として容量が大きくコーナーも多いためか、デザインがやや煩雑な印象も受けました。

## 御前崎市【広報写真部門】一枚写真

（審査委員） 朝日新聞社 静岡総局長 佐藤 実千秋  
静岡県広報デザイナー  
n-design 代表 西村 春人  
全日本写真連盟静岡県本部委員長  
藤田 寛司

## 個別の寸評

- サーフィン国際大会で、サーファーのダイナミックな動きと迫力ある水しぶきを、1000分の1秒のシャッターで見事に切り取った。
- 被写体を見せるために、背景の綺麗な海の色がとんでしまっているのが残念。波の表情が消えてしまっている… それ以外は申し分ない、良い表紙です。
- 迫力ある動きを素晴らしいタイミングで捉えている。白波のバックに人物を上手く納め、ボード裏面も写っていて申し分ない。シャッターをマニュアルに設定したことも功を奏したと云える。

## 藤枝市【広報写真部門】組写真

（審査委員） 朝日新聞社 静岡総局長 佐藤 実千秋  
静岡県広報デザイナー  
n-design 代表 西村 春人  
全日本写真連盟静岡県本部委員長  
藤田 寛司

## 個別の寸評

- 旧東海道沿線の歴史遺産のライトアップ事業。各史跡の夜の表情から歴史の重みを感じられた。思い切って大小を強調したレイアウトも雰囲気をよく伝えた。
- 伝えたいものがちゃんと伝わってくる誌面で悪くない。小さい写真はもう少し、大きく扱っても良かったかも。ページをまたいでいる親子の左側の切れている部分はいらないですね。
- 夜間撮影をした写真は余分なものが写らず画面を整理しやすい。特に3ヶ所の写真を大きく配したレイアウトも的確で、迫力のあるページになった。キャプションの入れ方も工夫されておりとても見やすい。

## 袋井市【映像部門】

(審査委員) NHK静岡放送局コンテンツセンター チーフリード  
出雲 守和  
テレビ静岡報道局長 永井 学  
静岡デザイン専門学校 講師  
株式会社アンテロープ 代表取締役社長 望月 伸晃

### 個別の寸評

- 町の自慢や地域活動、飾り気のない地域の人たち、これらを軽快で和みのある曲と俳優、そして明るく柔らかいタッチの映像で描くことで、派手ではないが穏やかで優しい印象を与え、等身大の町の魅力を効果的に伝えている。
- タレントや市民を使い歌詞・楽曲も制作して完成度は高いと思うが、かなりの費用がかかっていると察する。画面の一角にワイプで窓を作り、ダンスを最初から最後まで見せる工夫があっても良かったと思う。
- まずは映像作品以前にメディアミックスとして「フクロイイ」というコピーを構築したことが好評価。そのコピーに沿ってソング、振り付け、演出、撮影、編集がバランス良く作られている。